



Title	『Not that I know of. の語法について』
Author(s)	吉田, 一彦
Citation	Osaka Literary Review. 1967, 6, p. 22-34
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25771">https://doi.org/10.18910/25771</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 『Not that I know of. の語法について』

吉 田 一 彦

## I

Not that I know of. (=Not so far as I know. 「私の知るところではそうではない」) という表現は口語でよく聞かれるもので、一つの set phrase として使われている。

そしてこの that については文法的にいろいろな説明がなされているが、いまだ定説となったものはないようである。「英文法シリーズ」第5巻「関係詞」によると Jespersen は単一関係詞、Curme は複合関係詞の副詞的対格と解釈しているとのことであるし、また Poutsma, Zandvoort あたりになると、これを副詞節を導く接続詞あるいはそれに近いものと考えているといったぐあいである。

この表現自体を考えるとこれはすでに過去の遺物的存在かも知れぬが、こゝにはしなくも that の機能の発展していく一端がうかがわれるようである。

まず現代英語(とりあえず1940年以降の文学作品ということに限定して)の例文を検討してみてもまず目につくことは、この表現が使われるのは Yes-No question に対する返答としてであるのが圧倒的に多いことである。

例えば次のような場合。

“Is there another key?”

“Not that I know of.”

—A. Christie, *The Labors of Hercules*

(「もう一つカギがなかったかい。」)

「なかったと思うね。」)

Shayne considered this in silence, tugging at the lobe of his left ear.

“Did she ever tell anyone where she went?”

“*Not that I know of.* It caused some speculation at first....”

—B. Halliday, *Murder and the Married Virgin*

(シャインはこのことを黙って、左の耳たぶを引っ張りながら考えた。

「彼女は行く先を誰かに言うということはなかったかね」

「そんなことはなかったと思いますね。最初のうちはいろいろ取沙汰されましたがね。)」

次は as far as と対照的に使われている。

“Is there, *as far as you know*, any duplicate of that dagger in existence?”

Again Maître Grosier burst out, and again Jack overrode him. “*Not that I know of.* The setting was my own design.”

—A. Christie, *Murder on the Links*

(「その短剣と同じものがつくられていたかどうか御存知ありませんか。」

ふたたび家令のグロシアが口をきりかけたが、ジャックは彼をさえぎって言った。

「ないと思いますよ。しかも私がデザインしたものだし。)」

さてこの点を少し考えてみると、Is there another key?は、

There is another key or there is not another key. Which?

(a)

(b)

と言うことだから、Not that I know of. というのは (There is) not (another key) that I know of. と⑥の方の可能性を選択したことを意味している。従って、I think not., I suppose not., I'm afraid not. などの目的節を代表する not と異り、主節を代行する not と言える。つまり次の not と同様なのである。

Of course, you expect two brothers to be alike, but not that they should have the same tooth stuffed in the same way.

—C. Doyle, *The Stockbroker's Clerk*

(もちろん兄弟が似ているとは思いますが、まさか同じ歯を同じように詰めものをしているとは思うまい。)

さてそこで今、⑥の方の可能性を選択したと言ったが、その⑥を100%承認したのかと言うとそうではない。that I know of という modification を施したと言うか、とにかくなにがしか割引いた上での承認なのである。

すると that I know of が先行のものと文法的な関連を持たねばならない。その関連を説明したのが、前述の文法家の言葉だと考えられる。

## I

Jespersen 説の単一関係詞というのは、次例の which と同じく、先行の文が that の先行詞になっているということであろう。

"I'll go at it this way. Did the decedent keep large sums of cash in his office?"

"Very large sums."

"Which you knew about?"

—E. S. Gardner, *The Case of the Ice-Cold Hands*

(「ではこう聞くことにしよう。故人は多額の現金を事務所においていましたか。」「ええ非常な大金でしたよ。」「そしてあなた

はそのことを知っていましたか。J)

Curme の言う複合関係詞というのは、この *that* をいまの複合関係詞である *what* と同様のものとみて、その副詞的対格 (≡ *according what, as to what*) と考えているわけであろう。そうするとこの *that* に導かれた *clause* は副詞的修飾語として働いているわけで、Jespersen 説が追叙的なものに対して、制限的な色合いが濃くなっていると言える。Poutsma などの説はこの *that* を *so far as* に相当する接続詞と考えているわけであるが、これは *paraphrase* を重視した感じがあり、これだと特に前置詞 *of* の説明が難しくなる。

この *Not that I know of.* の起源的な用法と思われる次のような場合を考えてみると、なるほど Curme の考える複合関係詞がよいように思われるが果して *that* が *according what* または *as to what* の意味で使われていた事実があるのか、この点大いに疑問である。あとからつけくわえたつじつまを合わせるための説明だという疑いが大きい。

He took a book sometimes, but *never* read it *that I saw*.

He *didn't* even apologize *that I know of*.

もっともこのような語法は現代英語においてはほとんどみることがなく、専ら先述した *Yes-No question* に対する返答として *Not that I know of.* の形で用いられている。

しかしこのもとの形を考えてみると、

He *didn't* even apologize; (and) *that I know of*.

↓

Not; (and) *that I know of*.

で表わされるものであり、もとはといえば指示代名詞の *that* であったと考えられる。そして関係代名詞もこのようないきさつから生まれてきたものであってみれば、Jespersen の言う単一関係詞だという説明も根拠がないわけではない。

## Ⅲ

さて He didn't even apologize. と That I know of. (または I know of that.) とが意味的に分離している限りは、that は指示代名詞という言語意識のカテゴリーで受けとめられている。ということは、こゝではこの二つの部分をまとめて総合的にする必要がないということである。

しかしこの二つの部分の持つ内容はなにも常に分離して別々に表現しなければならぬわけのものではない。まとめて総合してもいいわけである。そうすると、この二つの部分はそのまとまりの度合に応じて接近をはじめ。そしてこの受けとめ方の変化、つまり speaker の意識の変化といったものが、言語表現の上にも徐々に反映してくる。

結びつきが比較的ゆるやかであれば、He didn't even apologize—that I know of. であり、これをさらに進めれば、He didn't even apologize, that I know of. である。これを指示代名詞の段階と明確に区別したければ、He didn't even apologize, which I know of. とすればそれが explicit なものとなることができる。つまりこの段階は関係詞の継続用法と対応していることがわかる。

cf. And desperately she goes bald-headed for the only thing she can think of — which is suicide.

—A. Christie, *Murder in Retrospect* (それで彼女は必死になってやみくもに考えつく唯一のことにとびついた——それは自殺ということにすることだった)

"The paper! Of course!" yelled Holmes, in a paroxysm of excitement. "Idiot that I was! I thought so much of our visit that the paper never entered my head for an instant ...."—C. Doyle, *The Stockbroker's Clerk* (「あの書類だ。もちろんそうだ。」とホームズは有頂点になって叫んだ。「なんと間抜けだったんだろう。私たちの訪問のことばかり

考えていたので、その書類のことなど少しも思い出すひまがなかったのだ……」)

そして次には二つの部分の結合がさらに密接なものとなる。つまり *He didn't even apologize that I know of.* とまったく融合してしまった状態なのである。これは関係詞の制限用法に対応していると言える。というよりむしろそうよんでも差支えないような現象なのである。

ところが英語においては、関係代名詞などの特性として、その先行詞はその先行の文の一部、それも特に名詞であるとする意識が強い。先行の文全体を先行詞の候補とする意識は極めて稀薄である。which に例外的にその用法が認められてはいるものの、それも専ら指示代名詞の色彩の濃い継続用法に限られている。

従って *He didn't even apologize that I know of.* などといった文の *that* はこの先行の文全体を先行詞とする制限用法の関係代名詞であって、英語においては極めて例外的な存在であると考えられる。

そしてこの例外的であるということは、英語の Syntax の整合性といった立場からみれば、このような文章は大変居心地が悪かろうということが容易に察せられる。そしてこの居心地の悪さということが、この種の表現が英語から姿を消していく大きな原因であろうと思われる。またこのような表現がなくとも *so far as I know* や *to my knowledge* その他の表現で容易に埋め合わせがついてしまうこともある。

そしてこの種の表現が *Not that I know of.* と先行詞に *not* だけを残した場合を除いてすたれていくのは、次のようなやはり *not* の意味に制限を加える同様な構文が、英語において確立した地位を有しているのと無関係ではないと思われる。

“But—but the whole village would have seen him !” “*Not* under certain circumstances.” “*Not* if it was dark, perhaps ; but the crime was committed in broad daylight.”

—A. Christie, *The Big Four* (「でも——でも、そうなら村の人がみな彼を目撃したことでしょう。」「ある状況のもとではそうはならないでしょう。」「多分暗かったりしたならそうでしょう。だけでその殺人は白昼堂々となされたのですよ。」)

さてこのように、そもそもは指示代名詞であった *that* は先述の二つの部分が分離している間は大変指示性の強いものであることは疑いがない。しかしこの二つの結合の部分が進むにつれて、*that* の指示性は余分なものとなり、代って二つの部分のつなぎ役としての連結性が強くなっていく。そうしてみると、*Not that I know of.* という化石とも言うべき表現は、この方向の最先端に達した記念碑とも言えるところがある。

とにかくも日常会話などにおける一つの便利な *set phrase* としての確かな地位を *Not that I know of.* が獲得すると、今度はそれをもとにして *variation* が生じてくる。次にその例の主なものを記してみるが、それぞれみなこの *Not that I know of.* にうらうちされてできているものと考えられる。そうでもなければ英語の *Syntax* では居心地のよくない筈のこの種の表現がそうそうでてくるはずがないと思われるからである。いずれも *Yes-No question* に対する返答となっている。

“Did he ever say anything at all about a secret?” “*Not that I can remember.* But, for all that, there *was* (Italics not mine) a mystery about him....” —A. Christie, *Murder on the Links* (「彼は秘密について何か言いませんでしたか。」「私の記憶している限りではそんなことはありませんでした。しかしそれにしてもあの人には謎のようなところがありましたよ……」)

Poirot nodded. “Anyone else?” “*Not that can be remembered.*” —Id., *Hickory, Dickory, Dock* (ボワロはうなづいて「他に誰かいませんでしたか」と尋ねた。「記憶してい



る限りでは、他に誰もいません。』)

“A man named Fitzgilpin?” Rodman looked surprised.  
 “Not that I am aware of.”—B. Halliday, *Too Friendly, Too Dead* (「フイッジルピンという男ですか。」ロドマンは驚いた様子であった。「どうもそうではなさそうですよ。」)

“Suite Four-Thirty, Hank. Got anything on it?” “*Nothing I know about.*” Hank’s face was worried, his eyes alert.  
 —Id., *Pay-Off in Blood*

(「430号室だ、ハンク。何かつかんだか。」「いやおれの知っている範囲じゃ何もない。」ハンクの顔は心配げで、目は用心ぶかった。)

#### Ⅳ

さて次に *Not that I know of.* を中心とするこの種の表現の文体的効果を考えることにする。前にも述べた通り、この表現は100%の否定を表わしているのではない。つまり割引のある内容の否定である。こうしてみると、「自信不足」「穏かな口調」「遠慮」「気がね」「慎重」といった消極的な意味合のつきまとうことも当然である。次の諸例にもこのような意味合のこもっていることが伺われる。

“Does Floyd run around with Estella?” “No. That is, *not that I know of.*”—B. Halliday, *Blood on Biscayne Bay*

(「フロイドはエステラとよろしくやっているのかい。」「いや、つまり、そんなことはないと思うがね。」)

“Did Mrs. Lomax distrust Katrin?” “Not at all,” Nathan Lomax said hastily, then qualified his statement immediately. “*Not that I know of....*” —Id., *Murder and*

*the Married Virgin*

「ロマックス夫人はカトリンを信じていなかったのですか。」  
 「いいえそんなことはありません。」とネイサン・ロマックスは  
 せきこんでいて、それから自分のいったことを訂正した。「私の  
 知っている範囲では信用していましたよ……」。

“Wait a minute,” Quinlan interrupted. “Didn’t anything  
 else happen at the Lawrel Club?” She wrinkled her fore-  
 head and said dubiously. “*Not that I know of. Nothing*  
*important anyway.*”——Ibid.

「ちょっと待って下さい」とクインランはさえぎって言った。  
 「ローレルクラブではほかになにか起りませんでしたか。」彼女は  
 まゆをひそめて、それからあやふやに言った。「なにもなかっ  
 たと思いますがね。とにかく重要なことはなにもありませんでし  
 たわ。」

従ってこの種の表現は以下にのべる指示代名詞の用法とは異っているこ  
 とがわかる。形は似ていても動機が違っているわけだが、形が似ていると  
 いうことはこの二つが混同して使われる可能性があるということであって、  
 そのような事態があったであろうことは十分考えられる。

“Bella Duveen. I know the name, but for the moment I  
 can’t place it. What’s her line?” “*That I do not know —*  
*but here is her photograph.*” —— A. Christie, *Murder on*  
*the Links*

（「ベラ・ダビンね。その名前は知っているが、今のところピン  
 とこない。彼女の専門はなにかね。」 「それはわからないが、写  
 真がある。」）

“How did they get him?” “*That I shall never know. I*  
*woke that night to find my house in flames, and was*

lucky to escape with my life....”——Id., *The Big Four*

(「どうして彼はつかまったのかね。」「さあそいつはわからないでしょうね、その晩目がさめてみると家が燃えていて、私は運よく命からがら逃げたんですからね。」)

これらは次のような指示代名詞の単なる倒置にしかすぎない。

“Not one of my successes, you know. I didn’t get her off.” “*I know that.*”——Id., *Murder in Retrospect*

(「私の成功の一つではありませんよ。私は彼女を救えませんでしたからね。」「わかっています。」)

そしてこれらは構文上 Not that I know of. が閉鎖的であるのに対して、開放的であって、active な働きをしていると言える。下記の例も同じである。

“All right,” I said, “I’ll see what I can do. Keep your mouth shut.” “*That I will,*” Bertha said. —— A. A. Fair, *Some Women Won’t Wait*

(「よろしい、できるだけことはしてみましょう。なにも言うてはいけないよ。」「そうするよ。」とバーサは言った。)

“About Richard Watson. Are you Mrs. Watson?”

“*That I’m not.* Who’s Richard Watson?”

——B. Halliday, *Murder and the Wanton Bride*

(「リチャード・ワトソンさんのことですが、奥さんでいらっしゃいますか。」「とんでもない、リチャード・ワトソンで誰なんです。」)

そしてこの方は指示代名詞の that を倒置して強調しているわけだから、積極的な意味があらわれるのも当然である。そして Yes-No question に対するばかりでなく、例文のように Special question などにも広く使い得るのである。

## V

これまで述べてきた *that* はいずれも、それまでに既に言葉になって表現されてしまったものをうけているものを問題にしてきた。しかしこれとは別に、まだ言葉に表現されていないものをうける、換言すれば一応 *that* の指す実体は心の中で認識されているが、それが言葉として表現されていないものを仮に指示しておくというやり方がある。例えば、

I don't agree to *that*, to what you have just proposed.

のような *that* である。先に述べた *that* の話題変形 (Topic transformation) とでも言ったものである。

これを次のように図式化するとこの *that* の接続詞化する過程がわかる。

I know *that*. He didn't even apologize.

↓  
I know *that*——he didn't even apologize.

↓  
I know *that*, he didn't even apologize.

↓  
I know *that*/he didn't even apologize.

↓  
I know/*that* he didn't even apologize.

これからもうかがわれるように、この *that* の特徴は、あくまでも仮のものであるだけに、そのあとにその *that* の particularization を要求する傾向が強い。言い換えれば、*that* のあとにそれをひきついで詳しく具体化するものが必要なのである。

*that* に対する意識は前述の表が下になるにつれて変わってくる。つまり指示代名詞として、文の前半に属していたものが、指示性がなくなり、接続詞というカテゴリーで意識され、文の後半につくものと意識されてくる。これで意識の上からも形の上からも *that* の変化が行なわれるのであり、発音も変化を遂げることとなる。

このようにこの *that* はもともと指示代名詞に糸をひくものだけに、注意をうながす効果があった。そこで次のような否定的なそう入句の注釈的

表現を導入するには極めて便利なものと考えられる。

And I have always felt, you know, that Nurse Harrison had her suspicions——*not that* she ever said anything——but one can tell, can't one, from a person's manner?  
——A. Christie, *The Labors of Hercules*

(それに看護婦のハリソンさんもおかしいと思っていたですよ——もっとも口に出していったというわけではありませんがね——だけどそぶりでわかるということもありますからね)

“The secrecy, it is impossible in an affair of this kind! *Not that* it matters. Well, Mademoiselle, what is it you want to know?”——Id., *Murder on the Links*

(「秘密を守るということはこんなことではとうていできませんよ。もっともそれが重要だと言うわけではありませんがね。それで、お嬢さん何がお知りになりたいのですか。」)

She was different, he said, from anything or anyone he'd ever met before. *Not that* I paid much attention to that.  
——Id., *Murder in Retrospect*

(彼の言うところだと、彼女は彼がいままで出会ったなにもともまた誰とも違った存在だということだった。もっとも私はそんなことを気にかけたわけではありませんが。)

...and they felt it was too bad there hadn't been a child to give her roots, so to speak. *Not that* Bella has really wanted a child. ——B. Halliday, *Murder and the Wanton Bride* (そして彼らは言わばかすがいとなる子供が彼女にいないのは残念だと思った。そうはいってもベラは本当に子供を欲しがりはしなかったが。)

Not that……but that の構文も同様に考えることができるであ

ろう。従ってこの *not that* は発生的にも意味的にも *Not that I know of.* の *not that* とは異質のものであることがわかる。しかしこの *that* も現在では、指示性を全く失い、ただ単に打消しのそう入句の *signal* の役割しか果たしていない。従ってこの *that* には *stress* はない。次の例はこの *that* と指示代名詞の並列したものであるが、指示代名詞の方には区別するため *stress* が置かれる。

His pictures were very fine—very fine indeed. Two of them were in the Tate. *Not that that* (*Italics not mine*) meant anything. —A. Christie, *Murder in Retrospect*  
(彼の絵は大層すばらしい——すばらしいの一語につきる。二つはテート絵画陳列館に入っている。それが別にどうってこともないけどね。)

*Not*, of course, *that that* means anything, but still it—well, there might be a connection.  
—Id., *Murder at Hazelmoor* (それがどうってことはないが、それでも、ひよっとすると何か関係があるかも知れない)

このように英語では二つの *not that* が形の上では共存していることがわかる。意味的にも発生的にも異ったものではあっても、このような状態は言語経済 (Linguistic economy) の点からは、二つの間に軋轢の生じる可能性が大いに考えられる。そして力の弱い方は強い方の影響を受けるのも自然の成行と思われる。そしてこの場合勢力の弱いのは、もちろん *Not that I know of.* の方であろう。

英語としてはこの表現がなくともそれに代わり得るものを工夫することができるが、そう入句の *not that* は貴重である。

Hornby の新刊の辞書 (*The Advanced Learner's Dictionary of Current English*, s.v. *KNOW*) には、

'Has Smith been ill?' — '*Not that I know of.*'

という例文があり、その *Not that I know of.* に *I am not aware of his having been ill.* と意味を説明しているが、これはそのような勢力のバランスが二種類の *not that* においてくずれつつある兆候ではないだろうか。